

ひとの終わる時節

私事にわたることをお許し頂きたい。心臓病が重くなつてからは、寝につくとき、「今夜大丈夫かな」、めざめると「ああ、生きていた」と思うようになった。まるでくせのように。しかし、内心では昨日までそうだったから明日も大丈夫だと、独り決めているから、恐怖が渦巻いているわけでもない。

いま、私は生涯で一番多忙の季節。身辺整理のために。多量にためていた日記や手紙、写真、古靴など……と、まず棄^すてていく。そのくせ、新たに新聞切り抜き、日記や原稿書き、手紙や返事は即日、読書メモもしておかねば……。棄てる、貯める——全く矛盾の一日。

ひとが終わるとは、終わりが絶対的に向こうからやってくることもあるが、同時に自分で締めくくることもある。草木のように、動物のように、枯れ果てるのではない。己が人生の総決算を自分でする存在。それが人間。棄てるべき自分と成つていくべき自分。ひとは自分をこの二つに見分けて、心の旅路を急いでいる。最近、私は

『終わりよければ』を出版したが、よき終わりとは、個人にとってはこの心の自然を完成することであり、国家としては個々人のその完成を物質的に助けることであると訴えた。そうでなければ国家存在の理由はない。

成っていくべき自分とは、結局、自分を超えたものへ自分をつなぎとめる営みである。祖母たちはそれを「おつとめ」と言っていた。朝夕、お仏壇に向かいお祈りし、御恩を謝し、お願いし、お許しを乞う。すべて「お」のつく心の働きである。わが老人ホーム任運荘の高年者の終わりも例外ではなかった。ある人は危篤の中で寮母たちを見回して「まだ生きていたんですね。おせわになりました」と旅立った。皆が泣いた。

中勘助の名作『銀の匙』で老伯母はつぶやいている。「この年まで生きたで、いつお暇してもええと思つて、いつも寝る前にはおひざもとへお招きにあずかるようお願ひ申しては寝るが…」と。

(一九九〇年五月七日)